

駒場友の会

会報第15号

新入生歓迎講演会

四月十四日(水)に、講演会「科学と技術のあいだ…トランジスタから超LSIまで」を開催しました。

(株)ソニーで半導体開発に長年関わってこられた仲井雅光さん(基礎科学科卒業)が、今や私たちの生活に不可欠になった多種多様な半導体の最新情報を紹介され、それらが生まれるに至った製造技術の発展過程を開発現場の視点から興味深く話されました。続いて、岡本拓司准教授は、二〇世紀以来のトランジスタやIC回路の基礎技術の革新局面で、他分野で開発された知識との融合が決定的な役割を果たし、日本の研究者も多大な貢献をしたことを、科学史の立場から説明しました。司会者は兵頭俊夫名誉教授(物理)。

東京大学教養学部 新入生歓迎講演会

科学と技術のあいだ

—トランジスタから超LSIまで—

岡本 拓司 本学准教授
科学史の立場から

仲井 雅光 (株)電子情報技術産業協会・(株)ソニー
技術開発の立場から

2010年
4月14日(水) 午後6時~7時30分

駒場キャンパス 数理科学研究科大講義室
(主講者の連絡先: 駒場友の会事務局)

入場無料 事前申し込み不要
(講演料は別、講演の方向を明した懇談会を開催します(参加費あり))

お問い合わせ先: 駒場友の会事務局 駒場友の会事務局
http://www.komaba.u-tokyo.ac.jp/lovekomaba

参加した約七〇名の学生は熱心にメモをとり、講演後の質疑応答や意見交流も活発でした。多くの新入生が大学での学問の生きた姿にふれるよい機会になりました。

新入生父母と学部長との懇談会

駒場友の会では、毎年入学式会場(日本武道館)で入会案内を行っています。入会されたご父母の方々に大学の様子を知っていただくために学部長との懇談会を毎年開催し、今年で五回目となります。五月二二日(土)の開催。今年度の新入生父母の入会は三三〇名、懇談会の参加者は二〇〇名でした。



冒頭の山影進教養学部長の講演に引き続き、キャンパスツアーでは、約十名のグループに分かれた参加者を二〇

名ほどの教員が引率して、図書館、講義棟、課外活動施設、食堂、購買部、駒場博物館、教員研究室等にご案内しました。一号館時計台に登るツアーとそのあとに開催された懇談会とはくに好評でした。参加されたご父母の感想は以下をご覧ください。

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/lovekomaba>



第九回演奏会

駒場友の会総会当日(五月二九日)にリコーダーとリュートの演奏会を開催しました。リコーダーの本村睦幸さんは本学工学部のご出身。この分野の第一人者として国際的に活躍です。当日は、リュートの金子浩さんとともに、ルネサンスからバロックにかけての幅広い曲目を演奏されました。

ランベール、ファン・エイクによるリコーダー曲、ド・ヴィゼのバロック



ギターのための組曲に続いて、リコーダーとリュートの二重奏に移り、ロック、オトテールの組曲、ルイエのソナタ、アンコールにはリュートの「ファエトンのシャコンヌ」が添えられました。

十六・十七世紀の西洋音楽をめぐる貴重な演奏は、響きのよい音楽実習室の会場と相性がよく、典雅なスタイルに深い叙情が込められた意義深い音楽会となりました。

森田正光さん講演会

七月三十一日(土)、「気象予報士森田



さんの地球温暖化と未来のおはなし」と題して、お天気キャスターとして著名な森田正光さんが学生との対談形式で講演されました。夏休みに訪ねたイースター島の皆既日食に始まり、今夏の猛暑や世界各地で頻発する異常気象、また地球温暖化問題について、データを解析しながらご自身の見解を話されました。ユーモアを交えウィットに富む話には会場は盛り上がり、活発な質問も寄せられました。

第七回総会報告

駒場友の会第七回総会を、五月二十九日(土)十六時四十五分より、駒場コミュニティセンタープラザ北館二階多目的教室で開催しました。

総会は毛利秀雄会長の挨拶で始まり、来賓として、大学院数理学研究科長、一高同窓会、東京高校同窓会より祝辞を頂戴しました。

以下、議事の内容を報告します。すべて提案の通り承認されました。詳細は、駒場友の会のホームページ <http://www.cu-tokyo.ac.jp/lovekomaba/> をどうぞご参照ください。

(一)二〇〇九年度事業報告

瀧田佳子理事より報告がありました。①懇談会・講演会・演奏会などの開催 雁屋哲講演会(四月十七日)／新人生父母と学部長との懇談会(五月二三日)／第七回演奏会・高雄有希ピアノコンサート(五月三〇日)／教養学部説明会・オープンキャンパス行事(八月七

日)／第八回演奏会・マンドリン演奏会(十月二三日)／駒場の樹木をめぐる講演会とイベント・ホームカミングデー行事(十一月十四日)／山田洋次監督講演会(十一月三〇日)／鈴木秀美さん演奏会(十二月十五日)／有森裕子さん講演会(二月二七日)

②会報の発行、ホームページの拡充 会報は十三号を九月に、十四号を三月に発行

③会員・会友数(三月末日現在) 終身会員八一名、通常会員四四八名、会友一、五〇一名。一高同窓会員一八六名、東高同窓会員一一五名 計二、三三一名

(二)二〇〇九年度決算 別表の決算報告について、小島憲道監事よりその内容が適切である旨、監査報告がありました。

(三)二〇一〇年度事業計画 瀧田理事より説明がありました。①懇談会・講演会・演奏会などの開催 新人生歓迎特別講演会(四月十四日)／新人生父母と学部長との懇談会(五月二二日)／第九回演奏会・リコーダーとリユートのコンサート(五月二九日)／駒場博物館特別展・自然エネルギーの世界(七月十七日から)／第十回演奏会・ハープとフルートのコンサート(十一月五日)／駒場の樹木をめぐる講演会とイベント・ホームカミングデー行事(十一月十三日)

②会報の発行 十五号を九月に、十六号を三月に

発行予定 (四)二〇一〇年度予算案 山本泰事務局長より別表のとおり説明がありました。

(五)役員の選任 会長・毛利秀雄 副会長・竹田晃、遠山敦子 理事・浅野攝郎、江川雅子、大島利雄、風間勝昭、小林寛道、瀧田佳子、蓮實重彦、松本健、山影進 監事・小島憲道 関谷孝

(六)その他 以下の報告がありました。二〇〇九年度末をもって一高同窓会事務が駒場友の会に移管された。一高同窓会は今後三年間、駒場友の会の下で「一高同窓会担当専門委員会(委員長・

竹田晃駒場友の会副会長)として活動を続ける。

お知らせ
多数の会員・会友の皆さまからお寄せいただいた「学生のための寄付」の一部を提供することで、駒場図書館一階中央に「GENZU BOOKS」コーナーがオープンしました。駒場図書館、国立女性教育会館の協力を得て、駒場の学生に役立つ「男女共同参画」関連図書幅広く揃え、男女とも自立した新しいライフスタイルを提案しています。詳しくは、<http://lib.cu-tokyo.ac.jp/news/0163> をご覧ください。

2010年度		2009年度	
単位:円		単位:円	
収入の部	予算	収入の部	予算 決算
1 会費収入	5,800,000	1 会費収入	5,800,000 6,584,000
11 通常会員会費	2,000,000	11 通常会員会費	2,000,000 1,878,000
12 会友会費	2,800,000	12 会友会費	2,800,000 3,826,000
13 終身会費	800,000	13 終身会費	800,000 880,000
2 寄付収入	1,300,000	2 寄付収入	800,000 1,525,072
21 学生のための寄付	1,000,000	21 学生のための寄付	800,000 1,223,000
22 その他	300,000	22 その他	0 302,072
3 雑収入	17,000	3 雑収入	17,000 16,441
31 預金利息	15,000	31 預金利息	15,000 14,441
32 その他	2,000	32 その他	2,000 2,000
小計	7,417,000	小計	6,417,000 8,125,513
前年度繰越金	8,086,198	前年度繰越金	7,382,938 7,382,938
合計	15,503,198	合計	13,799,938 15,508,451
支出の部	予算	支出の部	予算 決算
1 印刷費	700,000	1 印刷費	650,000 606,112
11 会報・案内等	500,000	11 会報・案内等	450,000 502,845
12 封筒・便箋等	200,000	12 封筒・便箋等	200,000 103,267
2 通信費	1,045,000	2 通信費	786,000 1,086,725
21 郵送料	1,000,000	21 郵送料	750,000 1,021,180
22 電話使用料	45,000	22 電話使用料	36,000 45,545
3 事務経費	365,000	3 事務経費	345,000 307,159
31 事務用品費	50,000	31 事務用品費	50,000 11,004
32 ゼロックス使用料	120,000	32 ゼロックス使用料	120,000 87,199
33 インターネット接続料	45,000	33 インターネット接続料	45,000 48,204
34 会費等振込料金負担	150,000	34 会費等振込料金負担	130,000 160,752
4 人件費	1,780,000	4 人件費	1,580,000 1,708,261
41 事務局スタッフ	1,600,000	41 事務局スタッフ	1,400,000 1,579,761
42 臨時	180,000	42 臨時	180,000 128,500
5 運営費	983,800	5 運営費	985,800 1,045,128
51 事務室借料	233,800	51 事務室借料	235,800 233,800
52 光熱水料	50,000	52 光熱水料	50,000 52,822
53 会員証作成費	550,000	53 会員証作成費	550,000 586,890
54 その他	150,000	54 その他	150,000 171,616
6 事業費	1,500,000	6 事業費	1,783,866
7 寄付	1,000,000	7 寄付	600,000 895,004
8 予備費	43,200	8 予備費	89,200 -
小計	7,417,000	小計	6,536,000 7,422,255
次年度繰越金	8,086,198	次年度繰越金	7,283,938 8,086,198
合計	15,503,198	合計	13,799,938 15,508,451

駒場留学と西海固

林 燕平

西海固(せいかいこ)は中華人民共和国の寧夏(ねいか)回族自治区南部の七つの貧困県の総称で、中国で最も貧しい地域のひとつです。林さんは十年にわたる日本留学を一九九九年に終え帰国したのち、寧夏の地方機関に赴任し、六年間、周辺の農民の生活調査に打ち込みました。

私が十二歳の時(一九六六年)に文化大革命が起こりました。ようやく大学入学試験が復活したのは二四歳になった時でした。北京師範大学卒業後、結婚し、子どもを産みました。北京生まれで北京育ちの私ですが、学問の世界にあこがれて、自費で日本に留学することに決めました。大学院総合文化研究科(駒場)の関連社会科学専攻の修士課程に入学したのは三六歳の時でした。留学当初は、日本語が上達せず、貧しく、友人もおらず、苦難の連続でした。関連社会科学専攻では、多分野の学問的知識と方法を活用し、包括的な視点から社会問題を観察・研究・分析することが非常に強調されていました。私の研究テーマは、「中国の地域間所得格差・産業構造・人口・教育からの分析」



でしたが、テーマの選択と研究方法はこの専攻の特徴をよく反映しているもので、統計学のみならず、経済学、教育学、社会学などの先生の指導を受けることができました(博士論文は二〇〇一年に日本経済評論社より出版)。十年にわたる日本での生活を思い返すたびに、万感胸に迫るものがあります。私はすべて日本でゼロからスタートしたのでした。そのとき、関連社会科学専攻の先生方、多くの善良な日本の友達からたくさん助けられました。彼らの助けがなければ、今日の私は存在していないと思います。助けを求める気持ちや手をさしのべてもらったときの気持ちや忘れたいことは決してありません。このような気持ちは目に見えないものです。しかし、そういうことが人の一生に非常に大きな意味を持ち、その力ははかりきれないということはお当です。帰国して中国社会科学学院に就職し、しばらくした二〇〇三年正月の直前に初めて西海固における農民たちの生活に接する機会がありました。北京や東京とはまったく違う「農村中国」の実態を自分の目で見て、すぐにそこにとけこみ、末端の民衆と一体になったのです。西海固は一年に一回風呂に入ることさえ困難な地域です。農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困を中国では「三農問題」と言いますが、その縮図がここにあり、心が震えました。「行政村全数調査」を自力で始め、貧しい山村の生活実態を六年以上にわたって研究し、あわせて支援の活動を続けています。

私が現地を進めていた支援活動は現地の若い人々を対象とするものです。「貧しい女子大学生を助けよう」、「クラスの本箱(学級文庫)」といった援助プログラムです。前者は教育機会に恵まれない女子生徒が大学に行けるようになる奨学金です。後者は子どものための図書を学校に寄付するプログラムです。どちらも現地の人々にとても喜ばれており、若い人たちに希望を与えています。これらの実施については、日本の先生方から多くの支援をいただきました。ほんの一部を紹介すると、元上智大学臘山道雄教授、元早稲田大学西川潤教授、元日立総合計画研究所取締役副社長長木岡光様、東京大学医学博士小澤英輔ご夫妻、同大学山本泰教授、家主の村山豊夫ご夫妻、友人の中山弘様、佐竹まさ子様の方々です。西海固でのフィールドワークの成果は、二〇〇九年に、『山村の守望』(日本語では『山村を見守る』)という著書にまとめ、中国社会科学出版社から刊行しました。そこにおける一つひとつのデータはすべて農民の生活から掘り起こされたもので、どの観点も黄土高原で生まれたものです。正確なデータを基に、西北地域に位置する山村の現状、それらが現在の姿になった原因とロジックをわかりやすい言葉で整理しました。この仕事は、私にとっても学ぶところが多くありました。彼らの中の「自分たちの生活を変えたい」という強い気持ちが強く感じられたからです。その時に自分なりのやり方

彼らを助けたいと決心したのです。学術交流に国境はありません。それと同じように人々の友情や互助も国境を越えているものです。過去に助けられた人間が、その後にはより多くの人を助けることで、友情と互助の輪が広がっていくのです。社会科学の分野で研究する者にとって、様々な人と助けあうことは人生経験を豊かにし、社会への認識を深める恰好の機会となります。私を助けてくれた先生方と友達は今も私の研究を気にかけて、それと同時に西海固農民たちの生活にも注意を払ってくれています。(中国社会科学学院 数量経済・技術経済研究所研究員/日本語訳 銭一帆 国際社会科学専攻修士課程)

爽やかな風に包まれてゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なされた
コーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間 11:00 ~ 14:30、17:00 ~ 21:00

Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902

駒場ファカルティハウス内

ホロヴィッツの復活

松尾 治樹

駒場の音楽活動は、合唱やオーケストラ、オルガンやピアノなど多彩に展開されています。ピアノについては、コミュニケーションプラザ北館二階にスタインウェイ・フルコンサートグランドピアノが設置され、演奏会などで利用されています。これをお世話くださったのが松尾楽器の松尾治樹さんです。駒場の音楽活動の有力なサポーターというべき存在で、駒場友の会の活動にも多大なご協力をいただいています。

一九八五年十月二日にマルタ・アルゲリッチとミシエル・ペロフのデュオ・リサイタルがあり、アルゲリッチも師事したことのあるロンドンの名教師マリア・クルチョ先生もまたま来日していて、そのコンサートに見えたので、終演後に皆で六本木の鮎屋へ行くとことになりました。

その数日後にバリのシャンゼリゼ劇場で「世紀のピアニスト」ウラディミール・ホロヴィッツのリサイタルがある



二度目の来日公演終演後会場を出るホロヴィッツ一行(86年6月28日、昭和女子大学人見記念講堂)。右端よりマネージャーのピーター・ゲルプ氏(現在はニューヨーク・メトロポリタン歌劇場総裁)、ホロヴィッツ、筆者。左端は専任の調律師フランツ・モーア氏。

ことから、話題は自然と、ホロヴィッツが八三年に初来日した時に吉田秀和先生が書かれた「ひびの入った骨董品」云々という批評のことに及びました。

NHKが実況放送した初来日公演の録画がたまたまその鮎屋にあるのを知ると、アルゲリッチがそれを観たいと言いだしたのです。彼女は初めのうちは「敬愛するホロヴィッツがこんなになつてしまつて！」と涙を流していたのですが、そのうちに「ここが凄い」、「あそこが凄い」、「あの歳で新しいレパートリーに挑戦するなんて！」と言つて食い入るように画面を観始めたのです。その時の様子が余りに印象的だったので、翌日ハンブルグのスタジオウェイ社に電話を入れて、今後もしホロヴィッツが何処かで弾くようなことがあったら、私は世界中何処へでも飛んで行くから必ずチケットを手配して欲しいと頼みました。

半年程して「一週間後にホロヴィッツがハンブルグで演奏する。本人は既にハンブルグ入りしてリハーサルも済ませた。彼が弾くことはもはや間違いない。約束通りチケットは用意したが、本当にあなたは聴きに來るのか？」と電話がありました。急な話でしたが、私は「勿論」と答えて、数日後にはハンブルグへ飛びました。

プログラムの一曲目「スカルラッティのソナタ」が始まった時は、いつまた前みたいに調子が崩れやしまいかとそればかりが心配で祈るような気持ちで聴いていました。二曲目に入つて

やっと人心地がつき、それからしばらくにも演奏を聴くことが出来るようになりました。

「これが本物のホロヴィッツ！」「彼は本当に甦つたのだ。奇跡が起きたのだ。そう実感した途端に嬉しくなつて涙がどつと溢れてきました。それからもう夢見心地でした。

休憩の時にロビーでアルゲリッチを見つ、「この為になんかわざわざ来たのです」と私が言うと「私も」という返事が返ってきました。

演奏が終わると直ぐに楽屋を訪ねました。マエストロは私だと判ると、「あの時どうして皆で自分を止めてくれなかったのか?」「あの時は弾くべきではなかった」「自分はもう一度日本へ行つて、皆の前でちゃんと弾けることを証明したい」「でも、もう自分を招聘してくれる所など何処も無いのだ」。彼の悲痛な言葉は私には魂の叫びに聞こえました。彼のマネージャーのピーター・ゲルプは、既に日本に売り込みを掛けていたのですが、返事は何処も「ノー」だったのです。

私が帰国するとちょうどマウリツィオ・ポリーニが来日中で、連日のように梶本音楽事務所の梶本真秀氏と会うことになりました。梶本氏の顔を見る度に、私はポリーニはそっちのけでホロヴィッツの復活ぶりや、彼の気持ちや、何とかももう一度招聘するように何度も頼んだのです。

梶本氏は最初のうちホロヴィッツはもううんざりと云つた調子でまったく

取りあつてくれませんでした。ちょうど折りよく、ハンブルグの前にモスクワでホロヴィッツが弾いたリサイタルの中継録画が私のところに送られて来ました。それを見た梶本氏は、初めて私の言っていることが嘘でない知り、それを確かめるべく、次のコンサートが予定されているロンドンへ出かけてくれたのです。

ホロヴィッツがロンドンからそのまま日本にやつて来ることになると思ひもありませんでした。

八六年六月に実現した彼の二度目の来日公演(上の写真)が大成功に終わったのは言うまでもありません。彼の名譽が回復されたことが私には何よりも嬉しかったのです。

(松尾楽器商会社長)

演奏会の予告

今年四月にアイルランド火山噴火のために中止となりました寺神戸亮さんの演奏会「シヤコンヌへの道」が、十一月二五日(木)に開催の運びになりました。会場は、駒場コミュニケーションプラザ北館二階音楽実習室の予定です。詳細は追つてお知らせいたします。

駒場友の会会報 第15号

2010年9月15日発行

駒場友の会

〒153-8902

目黒区駒場3-8-1 東京大学

駒場ファカルティハウス内

電話 03-3467-3536

FAX 03-3465-3334

郵便振替口座

00170-3-481649

メール

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページ

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/

ilovekomaba/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

http://www.sobun-printing.co.jp